

心を育てる音楽教育環境への一考察

Music to Develop the Soul: A Music Education Environment

武田 道子

Michiko TAKEDA

(昭和63年10月11日受理)

はじめに

“心を育てる音楽教育”を標榜しつつ音楽教育の目的をとらえてみると、次のようになるであろう。

音楽教育は、「情」につながる美感、「意」にかかわる向上への意欲の2つの側面で、人間の内的充実に貢献することに意義がある。すなわち「音楽美による調和的人間の育成」ということになる。そして、幼児にあっては、“ふくよかな心情の育成に寄与する”ということに集約することができよう。つまり、楽しい音楽・きれいな音楽に数多く触れさせ、その豊かな体験の積み重ねを通して「情」的に、また「意」的にも——ということになるわけである。

そこで、幼児期音楽教育のねらいを、具体的には“音楽愛好の心”に焦点化して捉えたいと考えるのである。

さて、幼稚園教育課程の「改善方針」(案)の2教育内容等(1)には、基本事項として次の4つが掲げられている。

- ① 幼児の主体的な生活を中心に展開されるものであること。
- ② 遊びを通しての総合的な指導が重要であること
- ③ 幼児が自発的にかかわることができるよう人的・物的な環境の構成が大切であること
- ④ 幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じた教育を行なうことが大切であること

「主体的」・「総合的」・「自発的」、そして“発達の特性或個人差をふまえて”と言う。まことに、ほんとうの意味で幼児の心を育てる教育のために適切な指針と言わなければならない。

本論は、学生を対象とした「自分の幼少期における音楽環境」の調査を起軸として展開されたものである。当然のこと、狭い意味合いにおけるいわゆる「環境」ということではない。

調査にもとづく研究の視点は次の2点である。

○ この子にもたせたい“ふくよかな心情”のために、音楽教育に包含されるどの部分がどのように役立ったのであろうか。

○ 逆に、それを阻害したものは何であったか。

以上により、“心を育てる音楽教育”への本質的な示唆の一端を探ろうとするものである。

I. 音楽教育環境調査

1. 調査

☆ 第1回調査

* 主題

- 1) 心に残る幼児期の歌
- 2) 心に残る幼児期の音楽的生活

* 対象・方法

- ・静岡大学1・2年生(昭和62年度現在)162名, 昭和62年7月実施
- ・自由記述方式

☆ 第2回調査

* 主題

- 1) 音楽の好き嫌いとその要因
- 2) [参考調査1]——園で経験した楽器
[参考調査2]——幼児期におけるけいこごと(音楽)

* 対象・方法

- ・静岡大学1・2年生(昭和63年度現在)172名, 昭和63年9月実施
- ・アンケート方式

2. 結果

☆ 第1回調査

1) 心に残る幼児期の歌

ア. 題材の側面からみた思い出の事例

- ① 1番印象に残っているのは、年長組の時に「一年生になったら」を他の組の子達と全員でまわくなって歌った時のことです。まわりがたまたま知らない子だったのと、もうすぐ一年生という不安を抱きながらの歌だったということで忘れることができません。戸友達100人できるかな戸というところにきた時、まわりの子は期待でうきうきして歌っているのに、“私は絶対100人もできないなあ”となぜか淋しい気持ちになったのも良く覚えています。

そして、小学校の卒業式の時、ふとこの歌を思い出しました。幼稚園の先生もきっと淋しい気持ちであの歌を指導してくれたんだろうなあと思いました。

「一年生になったら」——大学生になった今でも折に触れて思い出す懐かしい歌です。

- ② 「卒園式のうた」をみんなで歌った時、さびしくなって僕は泣いてしまった。音楽に感動した最初だと思う。
- ③ 保育園のオルガンでピアノを習っている友達に「ねこふんじゃった」を教えてもらい、たいへんうれしかった。6才になってから、やっとピアノを習わせてもらうことができた。
- ④ 私は人一倍音楽が好きで、小さい頃は歌ばかり歌っていました。大声をはりあげて歌っていました。～保育園で一番なつかしく残っているものに卒園式の「思い出のアルバム」があります。あの歌を歌った時は、小さいながら泣いていたそうです。また大好きだったわらべうたや手遊びのうたなどもよく思い出します。あの頃の純真・素朴な自分に戻りたいです。
- ⑤ 卒園式で“思い出のうた”を先生方がたくさん歌ってくれた時、その声がとってまきれ

이었다。そして、そのとき先生が泣いていたのでびっくりしたことを印象深く覚えている。

- ⑥ いつもお帰りの時に「家路」のレコードがかかっていた。その曲を聞くたびに保育園でお母さんを心待ちにしていたあの頃の様子がふと思い浮かんできます。

イ. 思い出に残る題材

<童謡・唱歌・上位33曲(284曲中)>

1. ぞうさん (件) 125	11. こいのぼり (件) 69	23. おかあさん (件) 41
2. チューリップ 113	13. 大きな古時計 65	24. お馬の親子 39
3. 犬のおまわりさん 112	14. ジングルベル 64	25. 大きな栗の木の下で 37
4. ねこふんじゃった 96	15. まっかな秋 59	26. 雪 35
5. ちょうちょ 83	16. ひなまつり 55	27. はとぼっぼ 32
5. 一年生になったら 83	17. 雨(あめあめあめ) 51	28. むすんでひらいて 31
7. お正月 79	18. お弁当のうた 49	28. 浦島太郎 31
8. 森のくまさん 76	19. 七つの子 47	38. さっちゃん 31
9. 海 75	20. かえるのうた 45	31. どんぐりころころ 30
10. 七夕さま 73	21. キラキラ星 44	31. めだかの学校 30
11. おもちゃのチャチャ 69	22. 汽車 43	31. かたつむり 30

<わらべうた 上位12曲 (38曲中)>

1. かごめかごめ (件) 50	6. あんたがたどこさ (件) 19
2. なべなべそこぬけ 38	8. 通りゃんせ 12
3. 花いちもんめ 30	9. うさぎ 10
4. 茶々つぼ 28	10. げんこつ山の狸さん 9
5. ずいずいずっこころばし 26	10. かくれんぼ 9
6. 絵かきうた 19	12. てまりうた 8

<テレビ・アニメの曲 上位10曲 (59曲中)>

1. およげたいやきくん (件) 22	6. ピンポンパンのうた (件) 10
2. 仮面ライダー 19	7. アルプスの少女ハイジ 9
3. ウルトラマン 14	8. パタパタママ 6
4. 山口さんちのつとむ君 13	8. 黒猫のタンゴ 6
4. ムーミン 13	10. 魔法使いサリーちゃん 5

2) 心に残る幼児期の音楽的生活

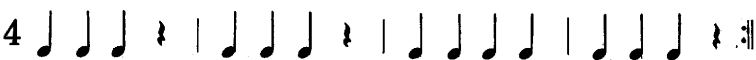
ア. 音楽的活動の側面からみた思い出の事例


なつかしく心に残る教師の指導事例

- ① 先生がオルガンをひいてくれて、そのまわりに集って歌ったり、お遊戯をしたり、また楽器もただ叩いているだけだったようだがとにかく楽しかった。それを、誕生会などで演奏したことが思い出に残っている。
- ② 通園バスの中でも、先生のタンブリンに合わせて歌を歌ったりした。園につくと音楽が

流れていて、園の生活の区切りをつけてくれていた。園庭ではいつもわらべうたなどで遊んだ。生活と音楽が結びついてとても楽しい幼稚園時代だった。

- ③ いろいろな楽器にさわらせてもらえてうれしかったことを覚えている。手作りの楽器や簡単なリズム楽器だけであったが、それを持ちながら歌ったり踊ったり——音楽の楽しみ、おもしろさを満喫していたように思う。音楽好きの心はその頃につくられたのだと思っている。
- ④ 音楽に合わせて踊ることが特に好きであった。リズムが違っても、人一倍大きな身ぶりで踊っていた。また、天気の良い時などは広場に出て踊ったりしたが、この時は特に楽しかった。あの頃は良かったなと思う。
- ⑤ 手作りの花を両手に、きれいな衣裳をつけて歌ったり踊ったりした発表会。その時の楽しさとうれしさを今でも思い出す。
- ⑥ 誕生会の時に、僕の為にみんなが歌を歌ってくれたのがほんとうにうれしかった。
- ⑦ 幼稚園の先生の家へ泊りがけで遊びに行き、家の近くを散歩しながら、花や木などの自然を見ながら、先生に歌を教えていただいた記憶……懐かしい思い出である。
- ⑧ みんなで輪になって歌ったことが懐かしく思い出される。僕は特に先生の優しくってあたたかみのある歌声がとてもすてきであったことを覚えている。
- ⑨ 数ある歌の中で僕の一番好きだったのは「新幹線の歌」だった。その歌の最初に「ビューワーン ビューワーン はしる～」というところがあるのだが、僕達の先生（尾崎先生）はその部分を歌うのがとてもうまくて、それで好きだったのかもしれない。それで僕は歌うのが大好きになった。
- ⑩ 歌の大好きな先生がいて、遠足の時など、アコーディオンを持っていろいろな歌を教えてくれた。そして、丸くなって踊ったりして楽しんだ。生活の中にいつも先生の歌があり、自分たちも身体全体で歌の世界に入りこんでいたようである。
- ⑪ ピアノでなく電子オルガンが部屋においてあり、音楽の感じに合わせて、先生がいろいろなリズムや音色で伴奏をつけてくれた。僕は、先生のひく伴奏がとても楽しみであった。今でも音楽が好きなのは、この頃に先生が自然に身につけてくれたことによると思う。
- ⑫ 私の保育園の先生は、ピアノやオルガンだけでなくハーモニカやたて笛でも伴奏してくれました。運動会も先生方がたて笛を吹いて、その後をみんなで行進したりしました。
- ⑬ 音楽会で僕はいつも指揮者をやっていました。指揮者をやるうちに僕は将来“ダン池田”のような人になろうと誓ったこともありました。
- ⑭ 僕は幼稚園で鼓笛隊に入っていて中太鼓をやっていました。「大きくなったら世界一のドラマーになろう」という野望を胸に一生けん命練習に励んだものでした。でもはっきりいって、今は音楽的才能はないと思います。でも、その時のリズムは今でも覚えています。

(学生K) 4 
 バ ナ ナ(ウン) バ ナ ナ(ウン) お い し い バ ナ ナ(ウン)

(学生M) 4 
 バ ナ ナ(ウン) バ ナ ナ(ウン) ト ラ さ ん ト ラ さ ん こ ん に ち わ (ウン)

- ⑮ 僕の幼児期は、音楽のお陰でなかなか楽しめたように思う。「ドナウ河のさざ波」のよ

うな高度なものはやらなかったが、だからこそみんなで「音楽を楽しむ」ということが出来たのだろう。能力が培われるのもこの時期だが、幼稚園という最初のステップでくじけさせたら立ち上るのは難しいと思う。やはり、この時期の音楽はほのぼのと楽しめるものでなくてはならないと思う。

不快なものとして心に残る教師の指導事例

- ① 仲よし発表会ということで一般の人にも観に来てもらう行事が年一回あった。その為に機械的・強制的に覚え込まされ、その練習量と緊張感からくる苦痛は大へんなものであった。楽器を楽しんだというよりも、演奏が出来ずに叱られていやだったという思い出だけが残っている。小・中学生になってもその気持はそのままである。
- ② 歌を歌うということよりも音楽に合わせて踊るということのほうが多かったような気がする。その時自分が楽しかったかというところでもなく、先生が非常に怖かったのが記憶に残っている。
- ③ 鼓笛隊で小太鼓の分担になり、ただ先生の言う通りにたたいていた。先生がとても恐く、また練習の時間が長く、太鼓の肩ひもが痛くてつらかった。忍耐力はつくと思うが、太鼓のおもしろさがわかることにならなかった。決して楽しかったというものではなかった。
- ④ ピアノを習っていた子がかぼち鍵盤楽器を担当し、自分は鈴やトライアングルのような打楽器ばかりであった。鍵盤楽器をやりたいかったが、ピアノを習っている人よりはうまくできないであろうと思うと出来なかった。いつまでも劣等感を持ちつづけてしまった。今でも無意識のうちに、ピアノを偉い楽器、リズム楽器は駄目な子の役割のような意識が残っている。～先生が勝手に出来る子に決めてしまい自分のやりたいものが出来なかった。
- ⑤ 幼稚園で、私はすごくいやな思い出があります。それは何といってもあのハーモニカ!! むずかしいのなんのって!! すったりはいたりそんなに上手に出来るわけじゃないですか。私すごく下手くそで……。何度もいやで泣いたのです。今でもハーモニカに対するいやな感情が残っています。沢山の子どもの中には、いくらやっても出来ない子が必ずいるのだからもう少し考えて指導してくれたらもっと良かったのと思っています。～ハーモニカの音がきれいに出来なくてハーモニカは嫌いだった。ハーモニカの時はずっと泣いていたのを思い出す。
- ⑥ 誕生会などで、たった1人で人前で歌わなくてはならないことになり、とても恥しくて保育園に行くのがいやだと親を手こずらせたことを覚えている。
- ⑦ ハーモニカが得意であり、手本として皆んなの前でいつも吹かされていた。本人はともうれしかったのだが、出来ない子との比較なので、とても心が痛んでいた。

イ. なつかしく心に残る家庭環境の事例

- ① お母さんが歌が大好きで「みんなの歌」のレコードなどをしょっちゅう買ってきて毎日聞いていたのでその歌を良く覚えています。今でも歌が好きなのはこの為だと思います。
- ② とにかく歌うことが大好きで、幼稚園で教えてもらった歌を家の人の前でよく歌って聞かせました。父親がいつもほめてくれて録音してくれました。今でもその時の録音テープが残っていて時々聞いたりします。
- ③ 小さい頃、寝る時に母親がよく子守歌を歌ってくれたのをなぜかよく覚えている。それを聞いていると安心して眠れたようだ。
- ④ 両親と共に、タンブリン、鈴、ハーモニカ、マラカスなどでよく家族演奏会を開いた。

これが私を音楽好きにしてくれたものだと思います。また、父がよくクラシックのレコードをかけていたので、知らず知らずのうちに頭の中に入っていた。

- ⑤ 両親が音楽好きだったので、私はいつも音楽にかこまれていました。私が音楽好きになったのはこのためです。

☆ 第2回調査

1) 音楽の好き嫌いとその要因

ア. [予備調査] —— 幼児期における好き嫌い

- *好き……151名(約88%)
- *普通……6名(約3%)
- *嫌い……15名(約9%)

イ. 好きになった要因

音楽的な内容とのかかわりから……140件

- ① とにかく声を出すこと、歌うことが大好きであった。(50件)
- ② 簡単な合奏だったが、みんなでいろいろな楽器を使って合わせるのが楽しかった。(25件)
- ③ 歌に合わせてお遊戯をすること、身体を動かすことがほんとうに楽しかった。(20件)
- ④ 今まで見たことも触れたこともない楽器を自由に使わせてくれた。(11件)
- ⑤ とてもきれいな音色でいつも鳴らしていた。(11件)
 - ・トライアングル(2件)・カスタネット(2件)・鉄琴(2件)
 - ・タンブリン(2件)・鈴(2件)・ハーモニカ(1件)
- ⑥ 園の生活の中の歌や音楽がいつも楽しかった。(9件)
- ⑦ ピアノ(オルガン)を習っていたので、幼稚園での音楽がますます楽しかった。(7件)
- ⑧ 理由もなくとにかく楽しかった。(3件)
- ⑨ 一生けん命努力したことがむくわれてうれしかった。〈ピアノ——“メリーさんのひつじ”・“ねこふんじゃった”〉(2件)
- ⑩ みんなと楽しい振りつけを考えたりしているうちに「音楽っていいなあ」と思った。(2件)

人がつくる環境とのかかわりから……147件

- ① 自分が表現したことを先生がほめてくれた。(32件)
- ② 先生のピアノがとても上手であった。(31件)
- ③ 家の人(母・父・姉・兄・その他)が音楽好きであった。(27件)
- ④ 先生の歌声がとてもきれいだった。(24件)
- ⑤ 音楽好きの先生が大好きだった。(11件)
- ⑥ オルガン教室やピアノの先生がとても楽しく教えてくれた。(9件)
- ⑦ 仲よしの友だちがよくピアノを教えてくれた。(6件)
- ⑧ 自分が表現したことを親がほめてくれた。(5件)
- ⑨ 友だちの声がとてもきれいだった。(2件)

[参考事例]

- *1 引っこみ思案で人前で歌ったり踊ったりするのがとても恥しかった。でも楽器は大好きであり、ハーモニカも遊びながらいつの間にか吹けるようになった。とてもうれし

かった。楽器好きは今でも変わっていない。(音楽的な内容にかかわる事例)

- * 2 毎年一回行なわれる音楽発表会で、木琴をやらせてもらいとてもうれしかった。そして、熱心に練習し、発表会が楽しみだったことを覚えている。以来、大好きになりました。(教師が作る環境にかかわる事例)
- * 3 保育園の先生がオルガンを弾きながら歌っているのを見て、すごくうらやましくて私も弾き語りができるようになりたいと思っただけです。大きな美しい声で歌う先生を一生けん命にまねして自宅で歌ってみたりもしました。(音楽的な内容と教師が作る環境にかかわる事例)

ウ. 嫌いになった要因

- ① ピアノのおけいこがつまらなく、先生に手をたたかれたり、興味がわくような教え方はなかったのが嫌いになった。先生がとても恐かった。(12件)
- ② 発表会や卒園式で、セリフや動きの約束が多くて仲々覚えられず、また楽器もむずかしく先生にきびしく注意されて楽しくなかった。(12件)……参考事例*1に関連
- ③ 他の友だちと一緒に歌うのはよいのだが、一人で歌わせられると音痴がばれてみっともないので嫌だった。(9件)
- ④ 先生のピアノが下手でつまらなかった。(2件)
- ⑤ 姉妹はピアノを10年近くも続けた。自分は続けられず、それがコンプレックスに変わった。小・中になっても音楽は一番嫌いな科目であった。(1件)
- ⑥ 発表会の時で楽器の分担をきめる時、「どうせオルガンは〇〇ちゃん(私の名前)でしょ」と言われ、とても恥しかった。自分でも内心そのことが判っていたので余計恥しかった。(1件)
- ⑦ 楽器をひく事が大好きだったが、私の通っていた幼稚園では歌ばかりだったのでおもしろくなかった。(1件)
- ⑧ ピアノを習っていたので、幼稚園でやっている音楽レベルが低くてバカバカしいと思っていた。(1件)

〔参考事例〕

- * 1 うちの幼稚園は、全国的に鼓笛隊で有名(?)でした。一部の子は太鼓やバトン等をするのですが、他の大部分の子はリコーダーでした。鼓笛隊のお陰で全国各地をまわったのは良かったのですが、僕はリコーダーが吹けなかったので、旅先の演奏は口にくわえたまま指を動かしてみんなについていくというだけのものでした。実に苦しかった時が多かったです。……嫌いになった要因②に関連

2) 〔参考調査1〕……園で経験した楽器

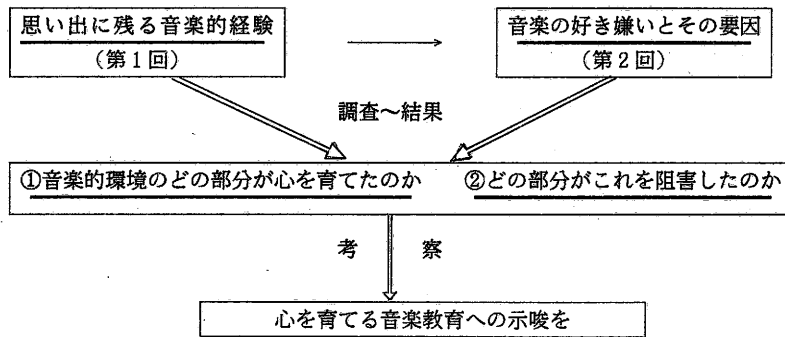
1. カスタネット	(件) 143	8. 大太鼓	(件) 48	15. マラカス	(件) 3
2. タンプリン	120	9. 鍵盤ハーモニカ	44	16. たて笛	3
3. 鈴	119	10. 鉄琴	28	17. トリミカ	2
4. トライアングル	98	11. ウッドブロック	28	18. アコーディオン	1
5. 小太鼓	61	12. シンバル	15	19. オカリナ	1
6. ハーモニカ	51	13. ベルリラ	8	20. ドラ	1
7. 木琴	50	14. 拍子木	5		

〔参考調査2〕 ……幼児期におけるけいこごと（音楽）

	男 (%)			女 (%)		
	ピアノ (オルガン)	21.5		37.5	40.5	61.0
エレクトーン	16.0	19.0	80.0			
バイオリン	0	2.0				
鼓 笛	3.0	2.0				
琴	0	1.0				
な し	59.5			15.0		

II. 考察

以上の調査とその結果とは、計画にもみられるように、次の構想を軸にして実施され得られたものである。



さて、第1回「思い出に残る音楽的経験」・第2回「音楽の好き嫌いとその要因」という2つの命題に寄せられた学生からの事例内容が、あるものについて互いに含み合う性格のものになったのは、むしろ論文テーマの本質に照らして、自然のことであると考えられる。

そこで、考察はあくまでも焦点化された視点に即して行なわれねばならない。

☆ 第1回調査

1) 心に残る幼児期の歌

ア. 「題材の側面からみた思い出の事例」について

“心の歌（音楽）”にまつわる幼なき頃の思い出は、次の点でまことに特徴的である。

- * 心の歌（音楽）は、子どもの遊びや生活また行事などを場として培われる。したがって、歌の場合題材のもつ歌詞内容は重要な意義をもつことになる。——事例①・②・④・⑤・⑥

- * 心の歌（音楽）——その対象は、まず先生であり、友達であり、そして父母である。ここでも当然のこと歌の場合の歌詞内容は大事な要素である。

事例にあらわれたかわいらしい次の心の動きなどは、まことに印象的である。

事例① 「一年生になったら」……“私には仲よしが100人もできるかなあ。幼稚園も終わりの時のこの歌は、先生が淋しい気持で教えてくれたんだろうなあ。”

事例② 「卒園式の歌」……“僕は泣いてしまった。音楽に感動した最初だと思う”

事例⑥ 「家路」…… “お帰りの音楽です。お母さんを心待ちにしていた保育園時代を思い出します。”

* かわいらしい音楽性への芽生えを感じさせるうれしい事例も多い。

事例③ 「ねこふんじゃった」…… “友達に教えてもらい、たいへんうれしかった。6才になってからやっとピアノを習わせてもらうことができた。”

事例④ 「わらべうた・手遊び歌」…… “なつかしく思い出します。”

事例⑤ 「思い出のうた」…… “先生方の声がとてもきれいでした。”

情操への高まりに結ぶべく題材の問題を考える時、以上3点の傾向は貴重な示唆を含むものとして心に留めねばならない。

イ. 「思い出に残る題材」について

ここでは、心を育てる題材の傾向を探るべく3つの視点からの考察を置くこととする。

* 曲の種類から

童謡・唱歌の284曲に対してわらべうたが38曲となっているのが、まことに今昔の感に堪えないというほかはない。しかも、この数字は、今から13～14年程も前のデーターということになるわけである。現時点でこの傾向がさらに進んでいるであろうことは想像に難くない。わらべうた衰退の考察が成立しそうである。

* 題材の類型から

絶対の優位を占める童謡・唱歌全284曲を、さらに用的機能の観点で類型化し、その上位から配列するとおもしろい様相が浮き彫りになってくる。

1	動物の歌 (例 ぞうさん) ……………	33.3%
2	行事の歌 (例 一年生になったら) ……………	24.3%
3	自然の歌 (例 まっかな秋) ……………	18.2%
4	遊びの歌 (例 大きな栗の木の下で) ……………	9.1%
5	生活の歌 (例 大きな古時計) ……………	6.1%
6	花の歌 (例 チューリップ) ……………	3.0%
6	乗物の歌 (例 汽車) ……………	3.0%
6	お話の歌 (例 浦島太郎) ……………	3.0%

以上、今の子供への適用を考えるに当っては、ここでも当然のこと時代の推移を考慮しなければならない。

* 「テレビの歌」の視点から

明らかにテレビの影響とみられるものが大変高率に存在していそうである。調査の結果にまとめられたように、事例全381曲中の59曲を占めているのである。

新鮮な名曲も多い中に、例えば、アニメにあらわれる歌の一部にみるような単なる「情動の満足」に終始するたぐいのものがあるのも事実である。これには特段の警戒が必要となりそうである。

この精査については、別の機会にゆずりたいと思う。

2) 心に残る幼児期の音楽的生活

ア. 「音楽的活動の側面からみた思い出の事例」について

「なつかしく心に残る教師の指導事例」では

事例の分析から指導法への示唆を次のように捉えることができよう。

- 楽しい遊びの音楽・生活の音楽としての立場で
- 子どもが自発的にかかわることができるような活動を通して
- “歌と踊りとおはやし(器)と”……総合的な扱いを重視して
- 楽しい発表の場のくふうにも配慮して
- きれいな範唱と伴奏に力を注いで

「不快なものとして心に残る教師の指導事例」では

事例の分析から指導法への示唆を次のようにまとめることができる。

- 常に指導法の改善に意を用いて
- 発達・個人差にはじゅうぶんに配慮して
特に目だつものとして

- ・ 器楽の無理強い練習

- ・ 子どもにとって苦痛この上ない個唱

—劣等感

- 歌と楽器と動きの指導にかたよりのないように

イ. 「なつかしく心に残る家庭環境の事例」について

進んで音楽に親しませようとする父母の配慮を示すものとして、事例の記載の中に次の表現が見られる。ほほえましいものとして参考になろう。

「レコード」・「ほめ言葉」・「録音」・「母親の子守歌」・「家族音楽会」

☆ 第2回調査

1) 音楽の好き嫌いとその要因

ア. [予備調査] —— 「幼児期における好き嫌い」について

調査の結果から指導への構想を次のようにおさえることができる。

- * 好き (約88%) ……美感への芽生えを大切に育てる。
- ↑
- * 普通 (約3%) ……楽しく歌ったりひいたりする態度を目指す。
- ↑
- * 嫌い (約9%) ……原因の究明、適切な対処のくふうとその実践に努める。

なお、次の資料は、上の幼児期のものとの比較において、指導の評価の面に充分生かされなければならない。

[参考資料] ……被調査者(172名)の現在の状況について

- ・今でも好き…139名(約81%)・普通…21名(約12%)・嫌いになった…2名(約1.2%)
- ・今でも嫌い…1名(約0.6%)・嫌いから好きになった…9名(約5.2%)

イ. 「好きになった要因」について

考察の前文に触れたことであるが、この調査によせられた学生からの事例内容は次の2つに強く関連をもつものである。

- 第1回調査 2) 心に残る幼児期の音楽的生活 ア. 音楽的活動の側面からみた思い出の事例……なつかしく心に残る教師の指導事例
- 第1回調査 2) 心に残る幼児期の音楽的生活 イ. なつかしく心に残る家庭環境の事例

したがって、ここでは命題に即した視点からの考察となる。

「音楽的な内容とのかかわりから」では
音楽的活動の領域から次のように整理することができる。

	幼稚園・保育園			音楽教室
	歌う活動	ひく活動(※1)	動きの活動	
歌う活動	35.7%	70.7%	86.4% (※4)	95% (※5)
ひく活動(※1)	35.0%	(※3)		
動きの活動	15.7%			
いろいろな活動(※2)	8.6%			

- 注) ※1 好きになった要因が園と音楽教室の2つに分かれる。
 ※2 聞く活動・環境が含まれる。
 ※3 音楽の表現活動の中心となる「歌う」・「ひく」をまとめたものである。
 ※4 領域“音楽リズム”の中心となる3つの活動をまとめたものである。
 ※5 幼稚園・保育園において音楽が好きになった要因のまとめである。
 ※6 園外でのけいこごと(ピアノ、オルガン)によって音楽が好きになったパーセンテージである。

まことに一目瞭然のことであるが、次の点には特に注目しなければならない。

- 声や楽器、また身体で100パーセント自己表現できるものが要因の主流である。
- ひく活動は、園外の5%を含めると40%に達し、歌う活動を凌いでトップである。音楽の表現要素である音色への興味と意欲がうかがわれる。
- おおむね妥当なバランスとは思われるが、動きのリズムが意に反して低率のようである。他日の再調査が必要となろう。

「人がつくる環境とのかかわりから」では

「音楽愛好の心を育てるためにどのような人的なかかわりが大切か」の調査内容では先ず次のように概観することができる。

	音楽好き	ピアノ	歌声	ほめことば	指導	計
先生	7.5%	21.1%	10.3%	21.8%	6.1%	72.8%
親	18.4%			3.4%		21.8%
友達		4.0%	1.4%			5.4%

- 圧倒的にかかわりの深いのがやはり先生であり、事例にあらわれた5つ(ほめことばと指導を同じ枠にすれば4つ)の要因のすべてにわたっている。先生の音楽する姿・豊かな音楽性、さらに優れた指導技術が子どもをひきつけるのであろう。
- 父母の欄の21.8%は貴重である。“ほめことば”と“音楽好き”の領域でも、さらにさらにの気持が大切である。
- 仲よしに遊びながら教えてもらったピアノ、そして友達のきれいな声……この関係もまたいろいろな意味合いで大事にしなければならない。
- なお、ほめことばが要因となった事例は、音楽好き・ピアノ・歌声に充分に匹敵して高

率である。教師・親の反省材料にもなるであろう。

ウ、「嫌いになった要因」について

調査にあらわれた事例内容は第1回調査 2) 心に残る幼児期の音楽的生活 ア. 音楽的活動の側面からみた思い出の事例のうち不快なものとして心に残る教師の指導事例に関連をもつものである。そこで、ここでの考察のねらいは、いわゆる「指導」にかかわらない音楽嫌いの要因があるのかどうか、もしあるとすればそれは何であろうか……このあたりの追求に焦点化されることになる筈である。

しかし、この思惑～“何かあるのでは？”の仮説は、見事につぶされたのである。すなわち、事例の核になるものとしてあらわれてきた次の表現は、内容的に不快なものとして心に残る教師の指導事例のものに完全に一致してしまっただけである。

①「つまらない」・「恐い」 ②「覚えられない」・「むずかしい」・「きびしい」 ③「嫌だった」 ⑤「コンプレックス」・「嫌いな科目」 ⑥「どうせオルガンは……」・「恥しかった」 ⑦「歌ばかり」・「おもしろくない」

そして、さらにさらに問題を含む次のような指摘さえもがあるのである。

④「先生はピアノが下手で……」 ⑧「音楽レベルが低くてバカバカしい」

さて、今回の仮説の崩壊は何を意味するのであろうか。

それは、音楽を嫌いにする要因は、その一切が人が作る環境とのかかわりに発しているということであり、その人とは実に教師以外の何者でもないということである。責任の一切は教師にあるのである。

人はすべて本性的に音楽好きである。

2) [参考調査1] 「園で経験した楽器」について

心を育てる音楽教育環境に寄与すべく、器楽の側面での迫り方は、第2回調査 1) 音楽の好き嫌いとその要因 イ. 「好きになった要因」について……音楽的な内容とのかかわりからの調査の考察に明らかなように、まことにすさまじいものがある。

この調査は、“印象として心に残る楽器”の観点で参考資料を得べく実施されたものである。前掲の学生による自由記述の集計に対して試みた考察から、次の事項の指摘を主張したい。

- 発達を含めていろいろな観点から考えたとき、無音程打楽器・有音程打楽器・旋律楽器の出方のバランスが妥当である。
- 上位10種の楽器のあらわれ方も妥当である。(大太鼓が予想に反して遅いが)
- カスタネット・タンブリンの1・2位は教育要領にそのまま一致し、意を強くするものである。
- 鍵盤ハーモニカは、当時としてはむしろ新しい楽器の部類であるが、機能面で子どもにも教師にも迎えられたものとして嬉しいことである。
- ハーモニカは約50%の学生の支持であるが、“不快”の事例もあったことを忘れてはならない。教師～指導法の問題として後に残したい。
- 擬声音楽器・音の出るおもちゃ・音のでる身近なもの、身体楽器などについて特に事例がなかったのは、課題～その題意の把握の仕方によるものと思われる。
- たて笛・アコーディオンが出現したのは特殊な場合の思い出と考えられる。一般的には発達的に無理である。
- オカリナ・ドラなどは、事情が許せば心に結ぶ描写的効果のためにおもしろい。

〔参考調査2〕「幼児期におけるけいこごと（音楽）」について

幼児期におけるけいこごと（音楽）と本論文の全体主題とのかかわりは、本質的に計り知れない程に関係が深い筈である。そして、この「けいこごと」の問題に包含されるものの中には、長あり短ありの批判・論評があるのも事実である。

この調査は、このあたりへの基本的な資料のひとつを確定すべく参考として実施されたものである。

以下、前掲「参考調査2」の集計に考察を加えることとする。

まず、結果の集計から読みとれる事項として、次のような実態がある。

- 1 男女ともピアノ・オルガン・電子オルガンなど鍵盤楽器の学習がその首位を占め、女兒はその80%、男児は40%に近い高率を示している。
- 2 弦楽器（バイオリン）は男児において0%、女兒において2%の低率である。
- 3 鼓笛については、男児において3%、女兒において2%…弦楽器に比べて僅かな優位を保っている。
- 4 琴は女兒においてのみかろうじて1%の地保を占めるにすぎない。
- 5 総じて、次の様相が捉えられる。

	男	女
何らかの音楽的なけいこごとをしている	40.5%	85.0%
音楽的なけいこごとは何もしていない	59.5%	15.0%

さて、私見である。

1について……けいこごと奨励の意ではない。この面が最も高い位置にあることは妥当な傾向としてうなずくことができる。

2について……音楽領域において弦楽器の占める地位は高い。しかし、公教育の立場・発達への配慮の2点から妥当の線と考える。

3について……弦との比較において妥当である。

4について……日本旋法の退潮～うなずける実態である。（Ⅱ 第1回調査 1）イの「曲の種類」の項に関連）

5について……「男児は運動や知育の習い事、そして女兒は情操にかかわる習い事（萩原英敏他——日本保育学会第41回大会発表 1988）」に照らしても当然の実態としてうなずけるものである。

以上であるが、関連する今後の研究課題のために2点についてメモを残したいと思う。

* 萩原英敏他によれば、親の立場からみて次の資料がある。

“おけいこは楽しいか？”	“はい”	68.7%
	“まあまあ”	26.2%
	“いいえ”	1.0%
	“ものによって”	4.1%

果してどうであろうか？

* 今回の調査にあらわれた“音楽的なけいこごとは何もしていない子ども（男59.5%、

女15.0%)”に対して、どう配慮するか。

おわりに

進め方の骨子とするところは、およそ次のようであった。

<目的理念> 「ふくよかな心」～「音楽愛好の心」

<方法理念> “主体的な生活”の中で



“自発的な音楽遊び”を通して

<実 証> 調査～考察

・心に残る歌とその思い出

・教師・親・友達など環境とのかかわり

さて、得たものは、次の2点に要約して考えることができる。

○ “心を育てる”ということの意義、またその本姿は具体的にどのようなものか。

○ “心を育てる”ことへの願い——その具現策の焦点は、やはり教師論に落ちつかざるを得ない。

しかし、“心を育てる音楽教育”への本質的な示唆を探ろうとした意図のためには、大局的にはまだまだ中途の域を出ないと反省せざるを得ない。今後の継続研究に挨ちたいと思う。

また、派生的に生れてきた問題点も大小多いのだが、その主なものに次の2点がある。

1. “心を育てる”視点からの「テレビの歌」の問題
2. “心を育てる”視点からの「けいごと（音楽）」の問題

重大な関連があるので精査を忘れないようにしたい。

おわりに、あえて園部三郎の著書のタイトルをそのままの形で置いておきたいと思う。

『下手でもいい 音楽の好きな子どもを』

参考文献

- * 小学館編『教育学全集9 芸術と情操』 小学館 1976年
- * 毎日新聞社編『教育を追う』 毎日新聞社 昭和53年
- * 岡宏子他『環境としての人間』 金子書房 昭和63年
- * ネルソン・B・ヘンリー編、美田節子訳『音楽教育の基本的概念』 音楽之友社 昭和61年
- * 園部三郎『続 下手でもいい音楽の好きな子どもを』 音楽之友社 昭和54年
- * 飯田秀一「幼児音楽教育への構想」 大東文化大学紀要 昭和60年
- * 武田道子「幼児の歌唱指導～導入時におけるつまずきとその治療」 静岡大学教育学部研究報告 昭和54年
- * 厚生省児童家庭局『保育所保育指針』 フレーベル館 昭和40年
- * 文部省『幼稚園教育要領』 フレーベル館 昭和39年
- * 萩原英敏他「幼児の習いごとに関する研究 その1～その2」日本保育学会第41回大会論文集 昭和63年